

るしへる

芥川龍之介

青空文庫

テンシユハジメセカイヲツクリ
 天主初成世界
 ツイデサンジユウロクシンヲツクル
 随造三十六神 第
 イイチノキヨシンヲ
 一鉅神
 云輅齊布兒（中略）
 ミズカラオモエラクソ
 自謂其智
 ノチテンシユトヒトシト
 与天主等
 テンシユイカツテオトシテジゴクニイル
 天主怒而貶入地獄（中略）
 るしジゴクニイツテクヲウクトイエドモ
 輅齊雖入地獄受苦
 シカモイツパンノコンシンハマキト
 而一半魂神作魔
 ナツテセケンニユギヨウシ
 鬼遊行世間
 ヒトノゼンネンヲシリゾク
 退人善念
 サヘキダイサンヘキレツセイノウチガイジユリヤクキヨダイジユニコタウルノゴ
 左關第三關裂性中艾儒略荅許大受語 |

破提字子はてうすと云う天主教を弁難した書物のある事は、知つてゐる人も少くあるまい。これは、元和六年げんな、加賀の禅僧巴はびあん、弇ななるもの著した書物である。巴、弇は当初南蛮寺なんばんじに住した天主教徒であつたが、その後何かの事情から、DS如来でうすによらいを捨てて仏門に帰依きえする事になつた。書中に云つてゐる所から推すと、彼は老儒の学にも造詣ぞうけいのある、一かどの才子だつたらしい。

破提字子はてうすの流布本るふほんは、華頂山文庫かちようさんぶんこの蔵本を、明治戊辰ぼしんの頃、杞憂道人きゆうどうじん鵜飼徹定うがいてつじょうの序文と共に、出版したものである。が、そのほかにも異本がない訳ではない。現に予が所蔵の古写本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、悪魔の起源を論じた一章であるが、流

布本のそれに比して、予の蔵本では内容が遙に多い。巴 弁自身の目撃した悪魔の記事が、あの辛辣しんらつな弁難攻撃の間に態々わざわざ引証されてあるからである。この記事が流布本に載せられていない理由は、恐らくその余りに荒唐無稽に類する所から、こう云う破は邪じゃ顯けん正しょうを標ひょう榜ぼうする書物の性質上、故意の脱漏だつろうを利としたからでもあろうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊巴いささか 弁の前に姿を現した、日本の Diabolus を一瞥いちべつしようと思う。なお巴は 弁べんに関して、詳細を知りたい人は、新村博士しんむらはかせの巴 弁に関する論文を一読よするが好よい。

二

提てうす字子のいわく、DS《でうす》は「すひりつあるすすたんしや」とて、無色無形の実体にて、間かんに髪はつを入れず、天地いつくにも充満して在ましませども、別して威光を顕あらわし善人らうくに樂を与え玉わんために「はらいそ」とて極樂世界を諸天の上に作り玉う。その始はじめ人間よりも前に、安助あんじよ（天使）とて無量無数の天てんにん人を造り、いまだ尊体を顕し玉わず。上かみいちにん一人の位を望むべからずとの天戒を定め玉い、この天戒を守らばその功德くどくに依つて、DSの尊体を拝し、不退らうくの樂を極むべし。もしまた破戒せば「いんへるの」とて、衆苦充満の地獄に墮し、毒寒毒熱の苦難を与うべしとの義な

りしに、造られ奉つて未だ一刻をも経ざるに、即ち無量の安助あんじよの中になか「るしへる」と云える安助、己おのが善に誇つて我は是DSなり、我を拜せよと勧めしに、かの無量の安助の中うち、三分の一は「るしへる」に同意し、多分は与くみせず、ここにおいてDS「るしへる」を初とし、彼に与せし三分の一の安助をば下界へ追い下し、「いんへるの」に墮せしめ給う。すなわち即安助高慢の科とがに依つて、「じやぼ」とて天狗てんぐと成りたるものなり。

破していわく、汝提なんじせう字子、この段を説く事、ひとえに自繩じじようじほ自縛まじなり、まずDS《どうす》はいづくにも充ち満ちて在ますと云うは、真如しんによほつし法性しょうじょう本分の天地に充塞し、六合りくごうに遍満したる理ことわりを、聞きはつり云うかと覚えたり。似たる事は似たれども、是ぜ

なる事は未だ是ぜならずとは、如かくのごとき此の事をや云う可き。さて汝云わずや。DSは「やひえんちいしも」とて、三世さんぜりようだつ了達の智なりとは。然らば彼かれあんじよ安助を造らば、即時に科とがに落つ可きと云う事を知らずんばあるべからず。知らずんば、三世さんぜりようだつ了達の智と云えば虚談なり。また知りながら造りたらば、慳貪けんどんの第一なり。万事に叶かなうDSならば、安助の科とがに墮だせざるようには、何とて造らざるぞ。科に落つるをままに任せ置たるは、頗る天魔を造りたるものなり。無用の天狗を造り、邪魔を為さするは、何と云う事ぞ。されど「じゃぼ」と云う天狗、もとよりこの世になしと云うべからず。ただ、DS安助を造り、安助悪魔と成りし理ことわり、聞えずと弁ずるのみ。

よしました、「じゃぼ」の成り立は、さる事なりとするも、汝がこれを以て極悪兇猛の鬼物きぶつとなす条はなはだ、甚ふしん以て不審ふしんなり。その故は、われ、昔、南蛮寺なんばんじに住せし時、悪魔「るしへる」を目のあたりに見し事ありしが、彼自らその然らざる理ことわりを述べ、人間の「じゃぼ」を知らざる事おびただ、夥おびただしきを歎いきしを如何いかん。云うこと勿れ、巴はび弁あん、天魔の愚弄する所となり、妄みだりに胡乱うるんの言をなすと。天主と云う名に嚇おどされて、正しょうぼう法あきらかの明さとなるを悟なんじらざる汝提じ字うす子すこそ、愚痴のただ中よ。わが眼まなこより見れば、尊まなこげに「さんた・まりあ」などばてれんと念ばてれんじ玉ばてれんう、伴ばてれん天連ばてれんの数ばてれんは多ばてれんけれど、悪魔「るしへる」ほどの議論者いちにんは、一いちにん人もあるまじく存いずるなり。今、事ついでの序ついでなれば、わが「じゃぼ」に会いいし次第ことば、南蛮ことばの語ことばにては「あぼくりは」と

も云うべきを、あらあら下に記し置かん。

年月ねんげつのほどは、さる可き用もなければ云わず。とある年の秋

の夕暮、われ独り南蛮寺の境けいだい内なる花木はなきの茂みを歩みつつ、同

じく切支丹宗門きりしたんの門徒にして、さるやんごとなきあたりの夫人

が、涙ながらの懺悔こひさんを思いめぐらし居たる事あり。先つごろ、

その夫人のわれに申されけるは、「このほど、怪しき事あり。日

夜何ものとも知れず、わが耳みみに囁ささやきて、如何いかんぞさばかりむくつけ

き夫のみ守れる。世には情なさけある男も少からぬものと云う。しか

もその声を聞く毎に、神魂たちまち恍惚として、恋慕おのずかの情とど自ら止

め難し。さればとてまた、誰たれと契ちぎらんと願うにもあらず、ただ、

わが身の年若く、美しき事のみなげかれ、徒いたずらなる思こがに身を焦す

なり」と。われ、その時、宗門の戒法を説き、かつ嚴おごに警めけるは、「その声こそ、一いちじょう定じょう悪魔の所為しよゐとは覚えたれ。総じてこの「じゃぼ」には、七つの恐しき罪に人間を誘さそう力あり、一に驕き慢ようまん、二に憤怒ふんぬ、三に嫉妬しつと、四に貪望とんもう、五に色欲、六に饕てつと餮う、七に懈怠けたい、一つとして墮獄の悪趣たらざるものなし。さればDS《でうす》が大慈大悲の泉源たるとうらうえにて、「じゃぼ」は一切諸悪の根本なれば、いやしくも天主の御教みおしえを奉ずるものは、かりそめにもその爪牙そうがに近づくべからず。ただ、専念に祈おら禱しよを唱となえ、DSの御徳にすがり奉つて、万一「いんへるの」の業火ごうかに焼かるる事を免るべし」と。われ、さらにまた南蛮の画えにて見たる、悪魔の凄じき形ぎようせう相そうなど、こまごまと談りければ、

夫人も今更に「じゃぼ」の恐しさを思い知られ、「さてはその蝙蝠わほりの翼、山羊の蹄くちなわろこ、蛇の鱗を備えしものが、目にこそ見えね、わが耳のほとりに蹲うずくまりて、淫みだらなる恋を囁ささくにや」と、身ぶるいして申されたり。われ、その一部始終を心の中に繰返うちしつつ、異国より移し植えたる、名も知らぬ草木くさきの薫かぐわしき花を分けて、ほの暗くき小路を歩み居しが、ふと眼まなこを挙げて、行手を見れば、われを去る事十歩ならざるに、伴ばてれん天連めきたる人影ひとかげあり。その人、わが眼を挙ぐるより早く、風の如く来りて、問いけるは、「汝、われを知るや」と。われ、眼まなこを定めてその人を見れば、面おもてはさながら崑崙こんろんぬ奴の如く黒けれど、眉みめ目さまで卑ひしからず、身には法服あびとの裾長きを着て、首のめぐりには黄金こがねの飾りを垂れたり。われ、

遂にその面を見知らざりしかば、否と答えけるに、その人、忽ち
あざわら嘲笑うが如き声にて、「われは悪魔「るしへる」なり」と云う。
 われ、おおい大に驚きて云いけるは、「如何ぞ、「るしへる」なる事あ
 らん。見れば、ようだい容体も人に異らず。蝙蝠かわほりの翼、山羊ひずの蹄、蛇なわ
うろこの鱗は如何にしたる」と。その人答うらく、「悪魔はもとより、
 人間と異なるものにあらず。われを描えがいて、醜悪絶類ならしむるも
 のは画工のさかしらなり。わがともがらは、皆われの如く、翼な
 く、鱗なく、蹄なし。いわん況や何ぞかの古怪なる面貌あらん。」われ、
 さらに云いけるは、「悪魔にしてたとい、人間と異なるものにあら
 ずとするも、それはただ、皮相けんの見けんに止るのみ。汝が心には、恐し
 き七つの罪、さそり蝎さそりの如くわだかまに蟠わだかまらん、」と。「るしへる」再び、嘲笑

う如き声にて云うよう、「七つの罪は人間の心にも、蝎の如くに
 蟠れり。そは汝自ら知る所か」と。われ罵るのしらく、「悪魔よ、退
 け、わが心はDS《でうす》が諸善万徳を映すの鏡なり。汝の影
 を止むべき所にあらず、」と。悪魔呵々大笑していわく、「愚おろか
 り、巴はびあん弇。汝がわれを唾罵だばする心は、これ即驕すなわき慢きようまんにして、
 七つの罪の第一よ。悪魔と人間の異らぬは、汝の実証を見て知る
 べし。もし悪魔にして、汝ら沙門しゃもんの思うが如く、極悪兇猛の鬼
 物ならんか、われら天が下を二つに分つて、汝がDSと共に治め
 んのみ。それ光あれば、必ず暗あり。DSの昼と悪魔の夜と交こまじ
 々もこの世を統すべん事、あるべからずとは云い難し。されどわれ
 ら悪魔の族やからはその性さが悪なれど、善を忘れず。右の眼まなこは「いんへる

の「の無間むげんの暗を見るときも云えど、左の眼は今もなお、「はらい
 そ」の光を麗うるわしと、常に天上を眺むるなり。さればこそ悪におい
 て全からず。屢しばしばDSが天人てんにんのために苦しめらる。汝知らずや、
 さきの日汝が懺悔こひさんを聞きたる夫人も、「るしへる」自らその耳
 に、邪淫じゃいんの言を囁きしを。ただ、わが心弱くして、飽くまで夫
 人を誘さそう事能わず。ただ、黄昏こうこんと共に身辺を去来して、それが珊さ
 瑚んごの念珠こんたつと、象牙に似たる手頸てくびとを、えもならず美しき幻の如
 く眺めしのみ。もしわれにして、汝ら沙門の恐るる如き、兇険無
 道の悪魔ならんか、夫人は必ず汝の前に懺悔こひさんの涙をそそがんよ
 り、速に不義の快樂けらくに耽つて、墮獄ごういんの業ごういん因いんを成就せん」と。わ
 れ、「るしへる」の弁舌べんぜつ、爽さわやかなるに驚きて、はかばかしく答もな

さず、茫然としてただ、その黒檀こくたんの如く、つややかなる面おもてを目
成まもり居しに、彼、たちまちわが肩いだを抱いて、悲しげに囁ささきけるは、
「わが常に「いんへるの」に墮おさんと思ふ魂は、同じくまた、わ
が常に「いんへるの」に墮おすまじと思ふ魂なり。汝、われら悪魔
がこの悲しき運命を知るや否や。わがかの夫人を邪淫じゃいんの穢あなに捕
えんとして、しかもついに捕え得ざりしを見よ。われ夫人の気高
く清らかなるを愛めずれば、愈いよいよ夫人を汚けがさまく思い、反かえつてまた、
夫人を汚けがさまく思えば、愈いよいよ気高く清らかなるを愛でんとす。これ、
汝しばしばらが屢七つの恐しき罪を犯さんとするが如く、われらまた、常
に七つの恐しき徳を行わんとすればなり。ああ、われら悪魔あせを誘さそ
うて、絶えず善に赴かしめんとするものは、そもそもまた汝らが

DSか。あるいははDS以上の霊か」と。悪魔「るしへる」は、かくわが耳に囁きて、薄暮はくぼの空をふり仰ぐよと見えしが、その姿たちまち霧の如くうすくなりて、淡薄たんぱくたる秋あきはな花この木の間に、消ゆるともなく消え去り了おわんぬ。われ、即ちそうこう惶として伴天連ぼてれんの許に走り、「るしへる」が言を以てこれに語りたれど、無智の伴天連、反かえつてわれを信ぜず。宗門の内証そむに背くものとして、呵責かせきを加うる事数日なり。されどわれ、わが眼めにて見、わが耳にて聞きたるこの悪魔「るしへる」を如何いかにかして疑う可き。悪魔また性善さがなり。断じて一切諸悪の根本にあらず。

ああ、汝、提字子でうす、すでに悪魔の何たるを知らず、況いわんやまた、天地作者の方寸をや。蔓頭まんとうの葛藤かつとう、截断せつだんし去る。咄とつ。

(大正七年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996年（平成8）7月15日第11刷発行

親本：筑摩全集類聚版芥川龍之介全集

1971（昭和46）年3月～11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

るしへる

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>